
Promise

相野谷 華苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P r o m i s e

【Nコード】

N 1 6 7 4 S

【作者名】

相野谷 華苑

【あらすじ】

異世界トリップ物です。会話する程度だったクラスメートの遠藤えんどう要が異世界に召還された時、たまたま彼から渡された日誌によって一緒にトリップしてしまった桐きり那乃なの。その世界に『必要』とされる彼に対し、『不必要』な彼女。皇帝から約束された「この地を汚す『魔』を退治すればそなたを元の世界へ返してやる」という言葉だけを頼りに異世界で頑張る少女のお話。

prologue 終焉

…どれほどこの時を望んだだろう？

目の前で黒煙に塗れて悶え苦しむ巨大な思念体を見つめ那^{なの}はただ一人長い時を思い出す。彼女の背後の騒音は活気と喜びに満ち溢れていたが、那乃の耳には入ってこない。右の二の腕から流れる赤い血が指先から剣を伝い、今目の前で悶える者を切った際についた血と混じり地上に流れ落ちるのを視線で追う、いつまで経っても湧かない現実感。それは別に今に始まった事じゃない。

「…これでやっと帰れるわ」

それは彼女だけが知る二重の意味を含んだ言葉。苦痛に満ちた『必要とされなかった自分』から自力で這い上がって『必要とされた自分』になった。努力はどの世界でも報われると心の支えに頑張ってきた、でももうそんな努力も必要なくなる。『必要』とか『不必要』なんて関係の無い自分の世界に帰れる。

那乃は束ねられた漆黒の髪を解き放つと、自分のすぐ後で膝をついて礼の姿勢を取る側近の騎士に静かな微笑みを向けた。それは那乃が彼に初めて見せた心からの笑みでアルトゥルことアルはどきりと胸を高めた

「アル、帰りましようか？」

「御意。ですがその前に傷の手当を…」

アルは自分の主が『魔の物』を倒した瞬間、いつもどこかこの世の者ではないような雰囲気が一層濃くなっていて声をかける事が出来なかったが、その右腕から流れ出る血を止めたくて仕方なかった。

「…これですか？」

那乃は今まで視線で追っていた傷口を改めて見て、この血の量に普通なら驚くだろうな…と何も感じなかった自分に苦笑する。

「大丈夫です。かすり傷ですから」

「ですが女性の身体に傷が残っては…」

つい出てしまった言葉にアルは激しく後悔する。それは彼が那乃の背に広がる火傷の痕を知っている数少ない人物だったからに他ならない。そんなアルの気持ちを探してか那乃は剣を一振りしてから鞘に納め、目の高さを合わせる為に彼の前に膝をついた。そしてにこりと微笑み、右手を彼の前に差し出す

「では、お願いします」

「…御意」

アルはそんな彼女の優しさに涙が出そうになるのを辛うじて堪える。騎士団の中では上司という立場なのに彼女は人を立場で判断せず、こうして優しい言葉をかけてくれる。彼女自身は誰に対しても決して崩さない礼儀正しい言葉使いと美しい所作で人を魅了する女性だった。本来ならば女性であり、元帥でもある彼女は後方で総指揮をとつてもおかしくない立場なのに、いつも単身で最前線へと向かった。彼女の直接部下にあたる隊の連中は国より、アルも含め彼女自身に忠誠を誓っている者達ばかりなので、その者達も最前線にいる事が多かった。

那乃が腕に包帯を巻き付けるアルに対し、彼にだけ聞こえる声で「アル、ありがとう」と言った。治療が終わると彼女は立ち上がり後方の部隊に向けて高らかに宣言した

「魔は滅されました。戦いは終わりです。長い戦いで残念ながら亡くなった者もたくさんいます。その者達の魂も連れて、愛する者の所へ帰りましょう」

そう那乃が言い終わると同時に地面が揺れるほど、皆が咆哮した

異世界（前書き）

主人公がひどい扱いされます。

そういうのが苦手な方はこの回は飛ばして下さい

異世界

それは少年と少女、二人にとっていつもと変わらない日常だった。強いて言うなら少年と少女がその日、同じ日直だった事ぐらい。クラスメートの授業の終わりのざわめきの中、少年こと遠藤^{えんどう} 要^{かなめ}は少女、桐^{きり} 那乃^{なの}に声をかけた。要と那乃は同じクラスメートとはいえ、ほとんど会話を交わした事も無い間柄だった。スポーツ万能、眉目秀麗で目立つ要に対し、那乃は低い身長と腰まである黒髪を持つ以外にこれといった特徴がない平凡な少女だったので、接点はまるで無かったのだ。

「桐さん、これ日誌。もう中全部書いといたから、後名前だけ貰える?」

突然要に話しかけられて那乃は驚いた。那乃ははっきり言って要の存在が苦手だった。まるで太陽のような要の笑顔を見るとどうしても怯んでしまうのだ

「あ…ありがとう」

那乃が日誌を受け取るうとして伸ばした手を要がさっと避ける。

「え?」

「桐さん…あの…もしよかったら、今日一緒に帰りませんか?」

「無理です」

即答で断った那乃に対して要はショックを受けたような表情になるが、那乃にしてみれば誘うにしても時と場所を選んで欲しいと思っただ。痛い視線、特に女子からのものに彼女の口元が思わず歪んで

しまつ。

「そつか…残念」

「ごめんなさい。用事があるので…あ、日誌」

とぼとぼと席に戻ろうとする要の手に日誌が握られたままだったので、那乃は手を要の方に伸ばし日誌を取ろうとした。そして間違えて要の腕を掴んだ瞬間。

——二人は光に包まれた。

突然包まれた光に一瞬目が見えなくなり、頭に周りの叫び声が響く中、まるでジェットコースターが落下する時に感じる胃の浮遊感。「手を離さないで！」とすぐ側で一緒に落ちる要に言われ、彼の腕を掴んでいた手をすっかり彼から握り直された。終わりの見えない落とし穴をどこまでも落ち続ける感覚に那乃はゆっくり意識を無くしていった

*

「おお！…これが『日の御子』か？」

皇帝と呼ばれる恰幅の良い男が台座の横で顔を上気させていた。その視線の先には石の台座に眠る要と那乃が居た。

「ふむ…。どうやら…こちらが御子ですな…」

大神官と呼ばれる白い髭を蓄えた年寄りが杖で要を指す。

「ならばこの者はなんじゃ？」

御子以外に興味はない皇帝は、自分の大事な御子と手を繋ぐ那乃に対し、汚らわしい者を見る様に鼻に皺を寄せる。

「詳しい事はわかりかねますが…これが接続されていた為に一緒に空間を越えたのでしょうか…」

大神官は『これ』と言った時に二人が握り合っている手を指し、言い終わるまでにそれを外してしまう。そしてそのまま那乃を台座から払い落とした。那乃の身体は地面に勢い良く落ち、そのまますぐ側の階段も落ちていく。

その落下の痛みに那乃が目覚めた。「…うう」と呻きながら彼女が最初に目にしたのは、大理石の階段だった。立ち上がるうとしたら落下の際に打った全身に痛みが走った。

「…なに？」

「うち…いらぬ者の方が先に目覚めおったわ…」

那乃は声が出た方に目を向けると、階段の上にいる皇帝と大神官、そして台座で眠る要が見えた。那乃は目にした知っている人物に声を掛ける。

「つく、…遠…藤…く…ん？」

那乃が声を出した瞬間に皇帝から罵声を浴びせられる。

「誰に許可を得て御子に話しかけておるのじゃ！！！！」

「…貴方は…誰？」

「ふんっ貴様などが知る必要は無い。もうよいっ！ここより即刻立ち去れ」

今まで学校に居た筈の自分が、全く知らない場所において、知らない男から罵声を浴びせられてる。そんな訳のわからない状況に那乃の思考はついていけない。

「去れっ…ここが何処かもわからないのに…貴方達が原因なんですか？元の場所に返して下さい」

「五月蠅いつ！衛兵！この者を連れ出せっ！！」

皇帝の言葉と供に入口に控えていた兵が那乃に近づきその腕を取る。

「痛い！！離してっ！遠藤君！！遠藤君っ！！！！」

那乃が必死に叫んでも台座の上の要は目覚めない。

「ええい！何をしておる、はよう連れ出せ！！全く下賤な女に名を呼ばれて御子が汚れたらどうするのじゃ…！！」

女の力で、それも傷ついた身体ではとても兵士の力に勝てる訳がなく、那乃はその場から引きずられる様に外に出された。

異世界（後書き）

え〜書いてる本人がムカついています（笑）

「何だこの皇帝？つてか要もさっさと起きて助けるよっ！..」

…つて心の叫びです。

取引（前書き）

主人公がひどい扱いされます。

そういうのが苦手な方はこの回は飛ばして下さい

取引

那乃は痛む身体に追い打ちをかける様にひどい体勢で連れ出され、そのまま扉の外どころかその建物の外へ放り出される。

「つつつ…」

「どうやって入ったか知らんが、ここは平民が軽々しく入室出来る建物ではない。皇帝陛下にお手打ちにならなかつた事を感謝して即刻立ち去るがいい」

那乃を連れ出した兵士は両手を叩きながら告げた。しかしそんな兵士の言葉より今自分が追い出された建物を見て那乃は愕然としてしまふ。

「そ…そんな…」

目覚めた時に学校ではない何処か別の場所だという事はすぐ理解出来た、それでも日本の…もしかしたら外国かもしれないと思っていた那乃の考えは、目の前の明らかに自分の知っている世界とは異なる絢爛豪華な建物を見た瞬間、根底から覆された

「ここは…何処なの？」

「何を言っている？…気でも狂ったのか女。ここはマルク皇帝が治めるグーラ帝国だ」

「マルク…皇帝？…グー…ラ帝国？そんな名前…聞いた事ない…」

その那乃の言葉を聞いた瞬間に兵士の顔色が豹変した。

「なっ！お前は逆賊か！？それならば即刻捕らえて。おいっ！この

女を連れて行け」

「え？」

兵士が叫んだ先は建物の奥で、そこから10人以上の兵士が出てくる。そして先程とは違って首に剣が当てられる。

「っひ…」

「皇帝陛下の御名を知らないなど…この愚女が…」

「や…っ、ち…違います…ほ…ほんとに知らないんです！」

那乃の言葉に耳をかす兵士などおらず、一度離された手が再び拘束され、先程とは違った場所に連れて行かれる。

「…何で…どうして？」

その眩きを何度も繰り返す那乃の目から次々と涙が溢れ出てくる。ずるずると別の兵士に運ばれた先は地下牢屋だった。『ガシャン』という音がまるで死刑執行の音に聞こえる

「こんな小さな身体で一体何を考えていたんだ？」

牢の鍵をかけた兵士に問われても那乃は何の返事も出来ない。ただただ恐怖に襲われすぐに牢の隅にうずくまる。那乃は「こんな現実じゃない。こんな現実なんかじゃない」と幾度も呪文のように呟く。

*

牢の前を兵士が行き交う度に怯えた那乃はいつの間にか疲労で眠りについていた。それを何度も繰り返す…那乃は今が何時なのかかわか

らなかった。那乃の精神状態がぎりぎりの状態の中、また兵士が地下に降りてくる音が聞こえた。しかもいつもと違う複数の足音に那乃の怯えは頂点に達する。那乃が牢屋の隅で足音が過ぎるのを待っているとその足音の集団が自分の牢の前で止まった

「ふっ愚かな小娘よのお」

その声は那乃がこの世界に来て初めて聞いた声だった。ハッと那乃が顔をあげるとそこには記憶にある恰幅の良い男、マルク皇帝が立っていた。

*

マルク皇帝の汚い物を見る様な眼差しに那乃は涙を流した。ほんとは叫び出したいのを下唇を咬んで堪える、ここに来てからの少しの経験で、何も語らない方が良い事を学んだ。

「おい…小娘。そなたが桐か？」

那乃は突然自分の名前を呼ばれた事に驚いて返事が出来ない。そんな那乃を見て皇帝は怒りを露にし、側にいた兵士のボタンを引き千切ると牢の中の那乃に投げつけた

「そなたが桐　　那乃かと聞いておる！！返事をせんかっ！！！」

「は…はい」

その那乃の返事を聞いて皇帝は兵士に牢の鍵を開けさせる。そしてその開いた扉から牢の中の那乃に近づいた。

「っひー！」

「最初から素直であればこのような目に遭わずにすんだのじゃ」

皇帝はそう言つと自分の扇で那乃の顎を上げる。

「御子がお、目を覚ましてお前の事ばかりを口にする」

「え…遠藤君が？」

その瞬間那乃は扇で頬を思い切り打たれた。「きゃっ」という悲鳴と共に那乃は壁にぶつかり、口端から血が流れ出る。

「忌々しい。御子の名を軽々しく呼ぶなと言つておるじゃろ…」

「……………」

「ここで其方を殺す事は簡単じゃが、どんなに隠してもそれが御子の耳に入らんと言ひ切れん。そこでお主と取引をしようと思つ。どうじゃ？」

「と…取引？」

それを言つ皇帝の表情がどんなに醜いものか、見えるのは那乃だけだった。

「そうじゃ。其方は知らんだろうが、この国も含め近隣諸国は常に『魔』の恐怖に晒されておる」

「…魔？」

「その『魔』を根源から断ち切る事が出来れば、其方を元の世界に返してやるつ」

「…え？」

那乃は元の世界に戻る事は出来ないと言つたのだが、皇帝の言つた言葉に自分の中で希望という言葉が浮かぶ。だが素直に皇帝の言葉を信じる事は出来なかつた。

「ほ…ほんとですか？」

「疑うのか？王族を？ならばこの取引は無い。この牢で野垂れ死ぬがよい」

そう言つと皇帝は立ち上がり牢を出ようとする。

「まっ待って！！やります！やらせて下さい」

那乃に選択肢などなかった

取引（後書き）

あゝまだまだこの皇帝おっさんが出てくる。

でも次からは大丈夫！！

那乃はまだまだしんどいけどムカつく皇帝おっさんは出てきません！

サバイバルゲーム その1

取引について更に皇帝から那乃に複数の条件がつけられた

* グーラ帝国以外の国で生活する事

* 御子と一切接触しない事

* 『魔』を断ち切った際のみ連絡する事

* 一切の援助はしない事

那乃に異論はなかった。ひどい扱いを受けた国と関わりを持ちたくはなかったし、要については多少罪悪感は無くなかったが、自分と違って優遇される立場に居る事と同じクラスと言っても数回しか会話した事の無い相手に対してそんなに依存感を持てなかった。

そして今那乃は痛む身体を我慢しながら馬車に揺られている。行先は聞いていない。ただ目的地に付けば馬車から下ろされるとい事だけが那乃に約束された事だった。

那乃にとっては何でもよかった。あの恐怖の国から出れるというだけでどんな場所に下ろされても生きていける気がした。幸か不幸か兵士との会話でこの世界の言葉が理解出来るという事も那乃の不安を和らげる材料になった

馬車の窓から固いパンと水袋を三度投げ込まれた。那乃はそれを一度には食べず、少しずつ食べ、残りは制服のポケットに入れた。

そうして七日経った頃、ようやく馬車は止まった。開けられた扉の向こうに広がる鬱蒼とした森。那乃は恐怖を覚え扉と反対側に後ずさったが、従者に無理矢理下ろされた。そこには一秒でも長く居たくないのか那乃を下ろすと馬車はすぐに来た道に戻っていく。従者からの言葉は何も無かった。

*

その頃グーラ帝国では皇帝と大神官が酒を酌み交わしていた。

「宜しかったのですか？娘を生かしておいて？しかも『元の世界に返す』などと…」

少しだけ表情を曇らせた大神官に皇帝は大きな笑い声を上げる

「ふっはっは！小娘に何が出来るといふのだ？『魔』を断ち切る？無理に決まっておろう？あんな小娘、我が殺さずとも送りつけた先ですぐ死ぬわ。それにあの小娘を生かして欲しいと震えて望む御子との約束もこれで違えてはいまい」

「……」

「『魔』など日の御子の加護がある今、我らには関係ない」

「…恐ろしい御方ですな」

口調とは違い、大神官の口元には卑しい笑みが浮かんでいた。娘はあの鎖国同然の『バルヒェット公国』に捨てられるのだからと自分の胸に浮かんだ不安など些細な事だと消し去った。そんな大神官に皇帝は同じような笑みを向け語る

「それではそろそろ御子の様子を見に行くとしよう。娘に対する慈悲をより詳しく説明せねばならぬからなあ。はっはっは。御子はわしに泣いて感謝するだろう」

そう言い席を立つと、頭を下げる大神官を横目に頷き、重い身体をユラユラと要の部屋へ向けた。それを見て大神官は

「日の御子も哀れよのお」

と一人呟くのだった

*

那乃は自分の下ろされた場所を見て少し安心した、「砂漠だったらどうしよう」とずっと不安だったのだ。

「森があるって事は、水も流れてるはずよね…」

ここが何処かなど後回しでいい。とにかく生命の維持が必須な今、水場を探す重要性を那乃はきちんと理解していた。そして近くに落ちていたしつかりとした木の枝を手に取ると余計な枝を排除し、簡易杖を作った。傷を負っている身体では水場を探す時間が長期戦になると考え、予めその為の対処をしておく。

「あたし…以外とサバイバルいけるのかも？」

元の世界でたまたま見たサバイバル番組の内容を思い出しながら、那乃はこの世界に来て初めて笑った。

サバイバルゲーム その1 (後書き)

ああ…性懲りもなくまた出てきやがったおっさん…。

でもようやく那乃が笑ってくれましたv v
これから頑張ってくれと思います！

サバイバルゲーム その2 (前書き)

一部不快な場面があります

サバイバルゲーム その2

那乃はまず自分の身体の負傷具合を確かめた。多少の無理が出来るのか出来ないのかによって今後の自分の行動が決まって来るからで、幸い身体は打撲が少しだけらしく、馬車に乗ってる間に出来ていた痣も薄くなっていた。

「よし、これなら何とかなる！」

こういう時はパニックになるのが一番死ぬ確率が高くなるとテレビで言ってた事を思い出し那乃は落ち着こうと深呼吸を繰り返す。あくまで冷静にと自分に言い聞かせる。まず水場を探す為にする事、彼女の前には改めて見ると森というより密林という方が正しい場所。頭上を見上げてても空も見えず閉塞感が漂う。ただ密林特有の湿度の高さは無いみたいで…「生粋の日本人っ子で、一度も海外なんて言った事ないんだから、密林を経験した事はないじゃんっ！」と自分に突っ込みを入れ、「はははっ」と笑う。

「……」

「こほんっ！とりあえず水…と、なら川ですな」

元の世界の常識が通じるかはわかんないけど、にわか仕込みの知識で何とかこの窮地を乗り切るしかないと思う。「よし」と自分に力づけると杖を片手に那乃は歩き出した

最初は歩きやすかった道も、下るにつれ段々と下生えが多くなり歩きにくくなってくる。杖で低木をなぎ払いながら下っていく。

「映像で見てたのをリアルに体験するなんてありえない！しかも…その番組の人元特殊部隊の人だったし…あたし単なる女子高生だ

し…」

ただ今はその番組に感謝するばかりなのだから、テレビっ子も捨てたもんじゃないと那乃は思う。テレビの彼が言っていた、こういう密林では大型生物より小さな虫や、蛇なんかが命取りになるとその言葉を覚えていて、それに注意しながら進んでいく。

*

かれこれ1時間ぐらいたにかく下って下ってしたのだが、まだ川のせせらぎらしい音も聞こえないので、那乃は昼食を取る事にした。地面の枯れ草の下などは蛇などの格好の隠れがあるので、杖で地面の枯れ葉や草を綺麗に掃除してから座った。ポケットに入れてあった固パンと水を取り出すと那乃は少しずつ食べる。

満たされるほど食べれるわけではないが、異世界で野生の実などはさすがに怖くて食べれないので、この少ない食料にも感謝する。

「しんつど…」

那乃が少しでも楽な体勢を取ろうと手を後についた瞬間に柔らかい物が手が触れ、「きゃっあ!!」と慌てて手を引っ込めた。

「…布？」

那乃は地面から一部が出ている触れた物を見てみると、それはどうみても布だった。

「何で布？」

その瞬間に思い当たった事にぞわっと背筋に何かが走る。

「…人には会いたいけど、骸さんには会いたくないんですけど…」

那乃は一度は無視しようとも思ったが、自分の軽装備の不安もあって何か必要な物を骸さんが持つてるかもしれないから…

「背に腹は変えられない…」

そういうと両手を合わせ祈りを捧げた後、その布の周りを丁寧に杖で掘り始めた。そしてやはり骸さんらしき者が見つかったが、悲鳴をあげずに済んだのはその骸がだいぶ時が経っているのか、すでに本体はなく、かなり痛んだ服と鞆が見つかっただけだったからだった。

サバイバルゲーム その2 (後書き)

サバイバルの参考はほんとにディスカバリーチャンネルというところで放送されている『man vs wild』という作品を参考に書いてます。

ちなみに…ゲテモノを食したりと結構グロい映像も多々ですけど…芸人なんかがそういうのを食すのと違い、ほんとに生きるための必死さが出ててあまり私は気にならないです。

サバイバルゲーム その3

骸を見た瞬間「ひいつ！」と那乃は飛び退いたが、遺体を前に「この態度は余りにも失礼だ」と思い直し、日本人らしく骸を前に手を合わせて「どうか成仏して下さい」と祈りを捧げる。

側の土は柔らかく那乃が杖を使うと結構な深さを掘れた。那乃はその穴に骸と骸が着用していた衣服を入れると穴に土を戻す。

「誰にも見送られないなんて…悲しすぎるよね…」

石を積み重ねた物の前にその骸が持っていた剣を指し墓石とし、もう一度その前で手を合わせた。

手を合わせながらふと那乃は思う。もし自分もこの人と同じ運命を辿った時、その時には今の自分と同じ様に誰かがお墓を建ててくれるだろうか？と考える。

「名前も知りませんが、貴方はこの世界で初めて共感出来た人です。どうか私の旅の無事を見守って下さい」

そういうと那乃は目を開けた。そしてはっと思い出した様にもう一度手を合わせる

「すみません。もし私がこの密林を抜けて人に出会う事があったらちゃんと貴方の事を調べて家族に遺品お渡しするので、貴方の持ち物貸して下さい」

先程まで無かった風が那乃の側をふっと抜ける。那乃は何だかそれが肯定の返事のような気がした。

「ありがとう」

そう言うと那乃は側にあつた鞆を開けた。中には地図・ナイフ・携帯食料が入っていた。何時の物かわからない携帯食料はその場で捨て、地図を開く。しかしこの世界の常識がわからない那乃に地図を読み取る事は不可能だった。最後に残ったナイフは実用的な物というよりは装飾品のようで、小さな鞆にはたくさんの宝石がついている。

「無いよりはマシだな…」

そう言うと那乃は鞆を大切に内ポケットにいれナイフを手に持つ。女性にもしっくりとくる柄の部分に何だか難しい紋章がついていた

「高貴な人だったのかもね…」

なんで高貴な人がこんな密林のど真ん中で亡くなったのか事情はわからないけど、きつと家族は探してるはずなのできちんと伝えてあげなくては…と思う。「よしっ！」と新たに追加された使命にも燃えて墓石に「待っててね！」という那乃はナイフで器用に制服のシャツの袖を裂いた。

「これを枝につけて、これからの道標を作ろう」

そう言うと那乃は裂いた袖を更に細かく裂き、枝に結べる小さな端切をたくさん作るとジャケットのポケットに入れ、まず墓石の上の木に結んだ。

そしてそのまま杖を持って再び歩き出した。前の印を見失わない距離で次の印を付ける。ナイフがあるおかげで先程よりもずっと楽に低木をなぎ払う事が出来、進む距離もかなり増えたが、一向に水

音は聞こえず諦めかけた瞬間。

目の前にこちらに気付かない『白蛇』が蜷局を巻いていた。

サバイバルゲーム その3 (後書き)

恋愛ジャンルに属してるのに、色恋の気配が一切感じられない……。
くはっ！

もうすぐ……。もうすぐなんです！

白蛇

蛇のサイズを見て那乃が最初に思ったのは「食べれるかな？」だった。普通の状態であれば蛇を食べるなど絶対に思わないが、空腹が慢性に続いた状態で見ると初めての生き物に思わずそんな事を考えてしまったのだった。

「…あたし…もう限界なのかな…」

那乃の意識がふつと現実に戻り、目の前の蛇を食べ物として考えていた事を苦笑する。

『貴方は…何者ですか？』

「…え？」

誰もいないはずの空間に聞こえる那乃の物ではない声。那乃は思わず辺りを見回してみるがやはり人の気配はない。

『何処を見ているのです？』

白蛇はいつの間にか那乃の方に頭を上げ、そして彼女は白蛇とばかり目が合った。

「こゝ、この世界って…蛇がしゃべんの？」

『…この…世界？』

シユルシユルと近づくと白蛇に那乃は同じ距離後に下がる。

「やっぱ…蛇が喋ってるんだよね…」

那乃はある程度は『異世界だから!』で通用すると思っただけが、やはり頭の中は元の世界の常識で成り立っており、目の前の蛇が話しかけてくるのを現実として受け止められない。

『蛇とは…無礼ですね。私を単なる蛇だと思っているのですか?』

「蛇…でしょ?どう見ても…」

白蛇は少しずつ離れる那乃に対して近づき事を諦め、その場に蜷局を巻いて頭だけを上げた。口元からチロチロと見える舌は爬虫類以外の何者でもない。

『単なる蛇が言葉を喋ると思いますか?それとも貴方の世界ではそれがまかり通る世界なのでしょう?』

那乃はブンブンと頭を振る事で返事をした。

『貴方は…やはり身に纏う物がこの世界の者とは違います。世界を渡って来た…』

「え…うん。グーラ…だっけ?その訳解んない…どうして?そいつにクラスメートと一緒に飛ばされたんだけど…」

『グーラ…あの国は…性懲りも無くまた…』

そう言うつとどんどん白蛇のサイズが大きくなっていく。那乃は大蛇のようになって白蛇を前にして支えてくれる大木のお陰でその場に崩れ落ちずにすんだ

「…大蛇?妖怪?」

『…ああ…すみません。怒りで我を失ってしまいました』

「あ…あの、私…食べられるんでしょうか?」

「出来るなら一思いに苦痛無くお願いします」と願いながら、那乃は今さっきまでこの蛇を食べようとしていたのが、逆に食べられる心配をするなど思ってもみなかった。

『食べる？私は人など食しません。私の名は白親^{はくしん}。これは仮の姿です。異世界の者』

「…神様？それならあたしを元の世界に帰せる？」

『神様：それは何でしょう？貴方はこの世界の禁術にて呼ばれた異質の者。帰す方法は私にはわかりません』

「…そうなんですか」

がつくりと頂垂れた那乃の姿に白蛇は蜷局をといて近寄り、那乃の手に絡む。突然手に感じたヒンヤリとした感覚に那乃は驚いた

「うひゃう！」

『早急に…貴方を連れてグランディモイズへ行く必要があります』

「ぐ…ぐらん…何？」

『バルヒェット公国の首都です…グーラが禁術を使用した事を伝えなければ…』

「ええ！？あたし『魔』とかつていうのを倒さないと駄目なんで、寄り道とかしてる暇ないんですけど」

『『魔』？…一体どう言う事ですか？』

白親はスルスルと那乃の手を登り、あっという間に肩に辿り着いた。那乃は顔のすぐ側に蛇の顔があるのを見て気を失いそうになる。

「ちっ近いっ！！」

『慣れて下さい。それよりも早く説明を』

「無理っ！絶対無理っ！」

目をつぶって首を振り続ける那乃に白親は「仕方ないですね…」
と言うと、那乃の肩から降り、地面に戻ると尻尾部分だけで立ち上
がり、あつという間にその姿を人型に変えた

白親の人型は腰まで伸びた白髪を肩辺りで結び、すらりと長い神
秘的な容姿と引き込まれるような銀の瞳を持つとてつもなく美形な
男の人だった

「…ぶっ！鼻血…」

『さあ…これで話して貰えますか？』

きらきらと輝くその姿をなるべく見ないようにして那乃は今まで
起こった事を白親に話した。

初めてのいい事

話を進めれば進めるほど白親は「何て事を…」と言い、眉間に皺が深くなる。那乃の声は時折震えながら、でもしつかりと自分の今の状況を伝えた

『…那乃』

「…というわけです」

『異世界で突然の事ばかり…怖かったですね』

白親にそつと抱き込まれ優しく背を撫でられた途端、那乃はこの世界に来てからずつと張りつめていた緊張を解き、そして思い切り白親に抱きつき泣き出した

「つう…うわあぁん」

『那乃…大丈夫です。貴方は私が守ります』

那乃が落ち着きを取り戻すまでずつと白親はその身体を抱いて、背を撫で続けた。しばらくすると那乃は泣き止み放心状態になる。

『那乃？大丈夫ですか？』

「…」

問われた声も優しく、那乃は掛けられるその声に段々と意識を取り戻した

「あた…し、ごめんなさい」

『那乃が謝る必要は無い。この世界の人間がした事を謝らなくてはならないのは私だ』

「そんな…白親さんが悪いわけじゃないのに…」
『那乃は優しいですね』

那乃は最初、白親の事を綺麗な人だが全てを寒色で身を固めてい
るので冷たい印象を抱いた。しかし、ふっと笑った白親の顔にその
印象ががらりと変わり、顔を赤らめた。

『那乃、やはり貴方は一度グランディモイズへ行く必要がありそ
うです』

「え？そう…なんですか？」

那乃は蛇の時の白親には対等に喋れたが、人型の白親はどうみて
も自分よりも年上に見えるし、気品が漂い上流の匂いがプンプンす
るので思わず敬語を使ってしまう

『ええ。日の御子がグーラの手にあるという事。そして貴方の身
を何時グーラが狙うとも限りません。その時には軍事的にグーラと
同等の力を持つバルヒェット公国に居るのが一番だと思えます。こ
の世界の事を学ぶのにもいいでしょうし…』

「…白親さんがそう言うなら…行きます」

那乃の返事に白親の肩眉が上がる。それを見て那乃は自分が間違
った答えを言ったのかと心臓の心拍数が上がった。そんな那乃を見て
白親は苦笑しながら言った

『その『白親さん』というのは…止めませんか？』

「…え、でも…」

『他人行儀な呼び方は悲しい。『白親』と呼んで頂けませんか？』

「よっ呼び捨ては…さすがに無理です」

『…では、何か他の名を授けて下さい』

「ええ」

白親の縋る目に那乃は「うん」と何度も頭を傾けながら、「ハク」…単純すぎるな。「ハクたん」「白親ちゃん」など、あーでもないこーでもないと一人で議論をした結果

「『ハク』って呼んでいいですか？」

と最初に考えたシンプルな物が一番いいと感じた。

『嬉しいです』

白親は返事をしながら、那乃を自分の腕の中に再び抱き込んだ。

そして愛しげに胸の部分にある頭に軽くキスを落とした

那乃は白親と出会った事はこの世界で初めての『いい事』だと思
いながら、その腕の中で安心して目をつぶった。

ウィルヒインのモリー

白親は腕の中的那乃が落ち着くのを確認してから、指笛を鳴らした。すると何処からともなく一匹の大きな白銀の獣が現れた。

「…やつ野犬!？」

那乃は元の世界で直に狼のような獣などを見た事が無く、目の前に現れた物を犬と勘違いした。白親は彼の服をぎゅうつと掴み怯える那乃に苦笑しながら、その狼が近づき伏せるのを待った。そして白親が口の中で何かを呟くと手に籠が現れる。

「那乃が食せる果実を持ってきてくれ」

白親が言つとその狼は立ち上がり一度頭を下げ、姿を消した。それを見て那乃は身体から力を抜く

『あれはウィルヒインと言います。我らに危害は加えないから安心して』

「ういる…ひ…ふいん？それは名前？」

『名とつか个体名ですね。多分那乃が『犬』と呼んだのと一緒にでしょう』

「じゃあ…あのういるふいんってたくさんいるの!？」

那乃は頭の中にウィルヒインと呼ばれた獣に囲まれた姿を想像して恐怖した。

『いえ、今はあの一頭だけです。この場の気が乱れた時には数を増やします』

「守り神みたい…」

『そうですね。我の手足となって動いてくれる大事な存在です』

そんな会話をしてるうちにウィルヒインは籠一杯に果実を入れて戻って来た。白親の側に籠を置きその側に伏せる。

「は…はやつ」

『この場の事をウィルヒインは全て把握してるんですよ』

「凄いね…ういる…ひい…ふいん？」

舌を纏れさせながらウィルヒインの名を呼ぶ那乃が可愛く、白親の顔に笑みが浮かぶ

『呼びにくいですか？』

「う…ちよつと」

『では、この子にも名を授けてはいかがですか？』

「…名前？あたしが付けちゃっていいの？」

フィルヒインは同意するように那乃の側に近づき、その手に鼻先をあてる。那乃は白親が「ウィルヒインが自分から動くななんて珍しいな…」と呟いてるのを聞きながら、自分の手の甲に感じる少し濡れた鼻先の感覚に、那乃は元の世界で飼っていた愛犬を思い出した

「じゃあ…森本サンで」

『…も…モリモトサン？ですか？』

「だ…駄目かな？元の世界で飼ってた犬の名前なんだけど…じゃあ…モリーで」

ウィルヒインは同意するかのように那乃の手を舐める。

『ウイルヒインは気にいったようですよ』
「じゃあモリー！よろしくね！」

グルルと喉を鳴らしてモリーは那乃の側に伏せた。それを見て白親はさらに驚いた様な顔をする

「ハク…どうかしたの？」

『ウイル…じゃない…モリーが伏せるのは服従を誓った相手だけなんです』

「え…じゃあ…仲良くしてくれるのかな？」

『多分ずつと付いて行きますよ』

「ほんと！？…最初怖かったんだけど…、ほんととはあたし動物大好きなのっ！だから…嬉しい。ありがと！モリー！」

那乃は側に伏せるモリーの背を優しくゆっくり撫でる。その毛並みの感触はピロードを思わせるぐらい気持ち良く、ずっと撫で続ける。モリーも気持ち良さげに前脚に頭を乗せ目をつぶった。

『さっ！では、まずは体力をつけましょう』

白親はそう言うつと籠の中の果実を器用に剥き、那乃に渡した。ここ数日固いパンしか食べてなかった那乃にとって果汁の滴るその実は食欲をそそのるのに十分過ぎるほどで、受け取ってすぐにかぶりついた。

「美味しい！」

白親に次々と違った実を剥いて渡されるが、口の中で甘く溶けるそれらの実をすぐに完食していく。その姿を見て白親は切ない思いと、那乃をその状態に追いやった者に怒りを感じた

『今は果実しかありませんが、お腹いっぱい食べて下さいね』
「うんっ！ハク…モリーありがとう」

那乃は満面の笑みを白親とモリーに向けた

ウィルヒインのモリー（後書き）

さて…次回はジャングル脱出です！

宝

お腹がいつぱいになった那乃は「ふい〜」と大きく息を吐くと、その場に倒れ込みそうになる。そして自分のポケットにあるナイフの違和感に気付いた

「あ…」

『那乃？どうしました？』

白親は空になった籠を出した時と同じ様に手の中に消すと、那乃の様子を伺う

「あの〜ここにくる途中に、お亡くなりになった方がいたんですけど…」

『？亡くなる？しかしここは虚ろ森。人が勝手に入ってくる事はまずないのですが…』

『ウツロモリ？』

何だか良くわからない言葉に那乃の言葉も片言になる

『簡単に言う通常は我の力が作用していて森の中に入る事も出来ないんですが…』

『…？』

那乃は自分も入ったし、確かにお亡くなりになってた骸さんも人型だったと頭が疑問でいつぱいになったので素直に白親に疑問をぶつけた。

「…何であたしは入れたのかな？それに骸さんも人だったよ？」

『異世界の人の那乃には我の力が作用しないんです。それとその骸も…異世界の迷い人でしょうかね…』

その時那乃は自分が持っていたナイフに付いた紋章を思い出し、白親に慌ててナイフを見せた

「これ！その骸さんが持ってたの！身元が確認出来ればと思って…ちよつと拝借してきました…」

そのナイフを目にした途端、白親の表情が凍った

『これ…は』

「え…もしかしてハクの知ってる人？」

『…ええ。その者は誰かわかりませんが、この紋章は…今から行くバルヒエツト公国の公爵家の紋章です』

那乃の顔がみるみる青くなってくる。

「…あたし、いけない事した？」

『いえ、これは公爵家から昔盗まれた家宝。きっとその骸は盗人でしょう』

「あ…そうなんだ。じゃあ…これ返しに行かないと」

『そうですね。これがここにあるという事は少し急いだ方がいいかもしれません』

「そうなの？」

何だかやつかいな拾い物をしてしまったと那乃は頭を抱えたくなかったが、落とし物は本人に返すか交番へがモットーの国からやってきたのだから、持ち主がわかったのなら返しにいかねば！と那乃はぎゅつと手に力を入れた

「では…、早速行きましょうか」

白親はそう言うとお出合った時の白蛇の姿になった。そして那乃が驚いている間に、彼女の手から後頭部に向かって進みそこにあつたフードに入つて落ち着いた

『これはいい袋ですね。那乃の世界の人間は皆このような物を常に持っているのですか？』

那乃は白親の問いに苦笑を浮かべた

「ハクの入ってるのはフードって言って、頭に被る帽子なのよ」

『ほくこれを被るのですか…』

どうやらこの世界にはフード付きの服はないらしく、フードのある服が好きな那乃は少しがっかりして俯くとそこに見えるナイフを見て叫んだ

「ああ~~~~~っ！！！！」

『那乃どうしたのです？』

「どうしよう…これ…家宝とか言わなかった？」

「ええ。公爵家の家宝です」

那乃の頭の中に散々家宝ナイフを使ってその辺りの草をなぎ払つたのを思い出す

「めちゃくちゃ使っちゃった…っていうかナイフ…草の汁いっぱいついてますけど…」

『……………』

白親の返事が無いので那乃がパニックになる

「はっハクうう〜」

『くつくつく。大丈夫ですよ。そのナイフの重要なのは柄と鞘の部分ですから、ナイフ自体が切れようが切れまいが関係ありません』

「よ…よかつたあ〜」

そう言つと那乃はへたり込んだ。

『さて、ではモリーに乗って早く城へ向かいますよう』

『びじやう！』

那乃はモリーの背にまたがると首をしっかりと掴んだ。するとふわっと身体が浮く感覚がし、ぎゅっと目を閉じた。

宝（後書き）

久々Promiseです。次回は城でのお話しと言っておきながら
…ふふナイフの話を入れ忘れてた〜！！という事で城は次回です
！ほんとです！！

バルヒェット公国 その1

モリーの背はまるでビロードの絨毯のような感覚で、あまりの気持良さで那乃は何度も寝てしまいそうになって、その度に白親から『空飛んでるんですよ？死ぬ気ですか？』と怒られた。何か話していないと寝そうになる那乃の為に白親は那乃の居た世界の事をたくさん聞いて、眠気から気をそらしてくれた

『見えますか？あれがバルヒェット公国です。もうすぐ着きますよ』

白親に言われて見た先には元居た世界のまるで中世時代を描いた様な街だった。那乃がそれを白親にそのまま告げると

『ならば那乃の世界は我々の世界より進んだ文明の世界なのかもしれないですね』

と返事が帰ってきた。

「でも魔法とかないよ？魔とかも居ないし……」

『それは世界によつての特徴は様々でしょう。しかし那乃から聞いた民の生活水準からするとやはり那乃の世界の方が文明は進んでいるのでしょ』

「そうなんだ」

そんな事を那乃が考えている間にモリーがどんどん地上に向かって降りていく。

『城の入口に降ろしてもらいますから』

「うん。わかった」

静かにモリーが地上に降りると、脚を折って那乃が背から降りやすくしてくれた

「ありがとう。モリー！」

那乃はモリーの首に顔を埋めると、グリグリと顔を押し付け愛情表現をした。モリーもそれを喉をグルルと鳴らして喜んでいる。

那乃がモリーから降りると、モリーは鼻先を那乃の身体に押し付け、その後「クウーン」と一鳴きした後にもた空に戻った

モリーが空に消えた後、周りを見渡すと突如空から現れた少女にそこに居た人達は戸惑い、騎士は剣を構えている

「え…っと」

『那乃安心して下さい。白親の使いで来たと言えば公爵まで話が通るでしょう』

「わ…わかった…」

那乃が息を吸い込んで話しかけようとした途端、騎士の一人が那乃に向かって言った

「あ…貴方は…？」

「あ…白親の、使いで…きました」

「白親様の…！」

周囲がざわめきに包まれ、騎士達が「すぐに公爵様にお伝えしろっ…！」と怒声を上げていた。そして気がつくとも目の前の騎士が膝をついてこちらに頭を下げていた

「え…あ…あの…」
「白親様の使いの方とは存じなかったとは言え申し訳ありませんでした」

グーラ帝国での待遇との余りの差に、那乃は戸惑うばかりだった。ここに白親が居るとわかればもっと大きな騒ぎになりそうだったので那乃は周りに聞こえない程度の声でそつとフードに居る白親に声を掛ける

「ハクってそんなに偉いの!？」

「…まあ…人とは違いますから…」

「凄いね〜ハク」

「……………」

その答えを聞く前に、城の扉が開かれ中から騎士とは違う一目で高価だとわかる衣服を来た集団が向かってくるのが那乃の目にとまった

『あれはこの国の高官達です』

「え…偉い人…?…う…あたし…先生とか…そういう類いの人苦手なんですけど…」

『那乃心配しなくて大丈夫ですよ。グーラ帝国でのような事は絶対ありませんから。公爵の所まで案内してくれるでしょうから言われるままに付いて行って下さい』

「う…うん」

那乃はそう白親に返事すると、その高官達の一団が自分の所へ来るのを見守った

バルヒェット公国その2

高官たちに案内された部屋は豪華だが品のいい謁見室で、那乃はそこで落ち着かない様子でソファに座っていた。それをフードの中で感じ取った白親が那乃の首元にそつと出てきて話しかける

『那乃？どうしました？』

「ハク……どうしよう？どうしたらいいの？ってというか…あの…うん…」

『那乃、落ち着いて下さい』

「無理、絶対無理！こんな部屋落ち着けないよ…」

『なら別の部屋に変えてもらいますか？』

「違うのっ！そうじゃなくて…」

いたって庶民の那乃の感覚では城の中などは観光スポットであつて、それもせいぜい修学旅行で日本の城に行ったぐらいで、こんな洋風な城はテレビの中でしか存在してない世界だつた。周りにあるもの全てが高級感に溢れていて、那乃の頭の中では『Don't touch』がその辺にいつぱい張られている気がして極度の緊張を強いられていた。自分が座らされたソファでさえもそんな気がして那乃は立ち上がってしまった

『…那乃？』

「ごめん…限界。この方が落ち着く…」

それからの時間、那乃はまるで観光旅行のように触らないように周りの絵画や家具を見て時間を潰した。どれも高級そうだなあという感想しかなかったが、飾り棚に入っていた生き物のクリスタルだけは唯一の例外だつた

「これ……」

『ああ……これは』

「モリー？」

『ええ、ウィルヒインはこの国では聖獣として崇められていますか』
『ら』

「綺麗……」

那乃が無意識に触れようと手を伸ばしたところで後ろから声が出た

「そちらを気に入って頂けましたか？」

「わあっ!!！」

突然かけられた声に那乃は驚いてしまい、触れようとしたクリスタルを落としてしまった。クリスタルの碎ける音に那乃の顔色が青くなる

「あっ……あ、あたし……」

那乃の脳裏にグーラ帝国での事がよみがえる。

明かりの一切無い暗い牢、蔑んだ瞳……常に与えられる痛み。

それらが一気にフラッシュバックして那乃はパニックを起こした。耳を塞いで屈みこみ同じ言葉しか発しない。

「ごめんなさい!ごめんなさい!ごめんなさい!」

『那乃っ!!』

白親はすぐに蛇の姿から人へと変化し、蹲って泣く那乃を腕の中に引き寄せた。そしてゆっくりと背をさすり、まじないの様に言葉を繰り返す

『那乃…大丈夫、大丈夫ですよ』

長い時間そうして白親の腕の中でおびえ続けた那乃は、疲れ果てそのまま意識を失った。白親はそんな那乃を一度強くぎゅっと抱きしめ、先程座っていたソファに横たえたようにしたが、那乃の手が白親の胸元を離さなかったのものでそのまま抱きかかえるように白親自体がソファに座った。そして声をかけてきた男に視線をやり、声をかけた

『公爵、このような体勢ですまないが…』

突然声をかけてしまった自分に非があるのは明らかだった公爵ライムント・ニクラウス・バルヒエットはその光景をただ呆然と見ているしかなかった。

バルヒェット公国 その3

眠った那乃の頭を優しく撫でながら白親はライムント公爵に視線を向ける。腰までの金の髪に珍しい紫の瞳は端麗な姿の一部でしかなく、全てにおいて人目を惹く存在、それが公爵ライムント・ニクラウス・バルヒェットであった。何事にも動揺しない彼が突然の出来事に呆気にとられていたが、すぐに自分を立て直し久しぶりに目にした白親に最上級の礼を取る

「使い様が来られたと聞きましたが、まさか白親様が直接いらっしゃってるとは…お待たせして申し訳ありません」

「良い。那乃がこのような状況でなければ出るつもりはなかった」

「使い様は…那乃様と申されるのですか？」

「那乃は使いの者では無い」

「…？」

白親は公爵に向けていた視線を自分の腕の中にいる那乃に向けた。怯え絶る様に自分の胸を掴む那乃に白親は眉間の皺を深くしていく。そしてその憎悪はグーラ帝国に向けられるのだった

「那乃は異世界人だ。性懲りもなくまたグーラの馬鹿共が召還を使った」

「…！」

公爵は目を見開き、言葉を失った。その様子を白親は冷静な目で分析し、彼が落ち着きを取り戻すのを待った。しかし待ってやった公爵から出た言葉に白親は舌打を打つ

「では…その方は『日の御子』なのですか？」

日の御子。白親はその言葉に嫌悪感以外を抱かなかつた。その言葉のせいで那乃がどのような目にあつたのか、那乃には言わなかつたが白親には人に触れるとその者の記憶を辿る力があり、最初の接触によつてこの世界に来てから那乃が受けた謂れの無い迫害も恐怖も彼女が語るよりもずっとずっと理解していた。そして那乃の異世界での記憶は霧がかかつた様にはつきりとはわからず、自分の力が及ばぬ人間、それこそが彼女を異世界人だと白親が確信した理由だつた

『……くだらん。やはり人は所詮人だな』

白親の呟きは公爵まで届いていなかったが、公爵の身体がぐつと硬くなる。白親の纏う雰囲気がかかりと変わったからだつた。白親を怒らせた理由がわからずに次の言葉を公爵が必死に探していると白親の腕の中の那乃が白親の氣に中てられたのか、ゆっくりと目を覚ました

「…ん？ハク？」

『那乃…気分はどうです？』

「…あ、あたし…どうしたんだ…」

那乃はそこで倒れる前の事を思い出したのか、ぎゅつと身体を硬くした

『那乃心配しないで下さい』

白親はそう言うと那乃が砕いたクリスタルへ手を向けた。まるで時間を戻すかのように欠片が一つに戻りはじめる。那乃は目の前で起こるイリュージョンのようなそれに目を奪われる。

「すごい…ハクつてすごい！」

純粹に尊敬の目で見つめられ白親は少し顔を赤くして『いえ…』と返した。そして今まで絶対零度のような白親の雰囲気は柔らかな春の日差しのように180度変わったことに、口には出さないが公爵はこの小さな娘の方が何倍も凄いのでは？と思ったのも無理はない壊れたものが直った事で少し落ち着きを取り戻した那乃は同じ空間に自分達の他に人がいる事を初めて認識したのだった。そして言葉を発すると同時に那乃は自分が白親に抱きかかえられた状態にいることも気付いた

「きゃあっ！！！！なっ何でっ！！！」

慌てて白親の体から飛び退き、その勢いでソファの横に転がってしまっ

「きゃあっ！！！！」

『那乃っ！？』

ごろんと転がった先に見慣れない革の靴を見て「日舞の着物を着ている自分ならばもう少しましな所作が出来たのに…」という那乃の心の声は誰に聞かれることも無かった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1674s/>

Promise

2011年8月10日22時11分発行